

魚病診断結果

田中真二・小畑晴美・宮本敦史・井上美佐・栗山 功

目的

県内の養殖魚の魚病発生状況を把握するとともに、その対策指導を行い魚病被害の軽減をはかる。

方法

平成12年4月～平成13年3月に水産技術センター、同尾鷲分場および同伊勢湾分場に診断依頼のあった病魚について魚病診断を行った。

結果および考察

診断結果を表1～表5に示した。マダイでは近年の傾向と同様にエドワジエラ症、パスツレラ症およびピバギナ症が多かった。ブリでは昨年に引き続きノカルジア症が5件確認された。ヒラメでは5月に中間育成中の放流用種苗(体重3～9g)で、昨年度と同様に体表のスレおよび筋肉内の出血を特徴とする原因不明の大量死が3件確認された。トラフグではヒラメ養殖業者が陸上水槽

表1 マダイの診断結果

病名	年齢	月別診断件数												計
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
イトウウイルス病	0			8	12	19	18	5						62
	1					2								2
イトウウイルス病	0		1	1										2
滑走細菌症	0	1	3	2								1		7
ピバギナ病	0											1		1
	1												1	1
エドワジエラ症	0					6	5	1						12
	1				2	7	4	1						14
	2			1										1
パスツレラ症	0			5	5	3								13
	1				1									1
白点病	0					1								1
トリソミア症	0			1										1
ピバギナ症	0	5		9	4	1				1		3		23
不明	0		1	2	4	3	1							11
	1					1								2
計		6	5	12	29	38	39	16	2	1	0	5	1	154

表2 ブリの診断結果

病名	年齢	月別診断件数												計
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
イトウウイルス病	0							1						1
ウイルス性腹水症	0			2										2
類結節症	0		6	2										8
リン球菌症	0		1	3	5		5	4	2	1		1		22
	1				1		1	1						3
ミコバカリ病	1							1						1
ノカルジア症	0								2					2
	1		1	1		1		1						3
細菌性溶血症	1	1	1	1										2
ペテリウム症	0							1	1	1				3
ペテリウム症	0							1						1
血管内吸虫症	0							1						1
不明	0		1		1									2
	1						1							1
計		1	1	11	5	8	3	9	9	3	1	0	1	52

表3 ヒラメの診断結果

病名	年齢	月別診断件数												計
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
イトウウイルス病	0												1	1
滑走細菌症	0		5											5
ピバギナ病	0		1											1
リン球菌症	1							1						1
エドワジエラ症	0					1		4	1	1			1	8
	1								1	1				2
鰓アノバ症	0		1											1
スケッチ症	0	1	3					1				1		6
	1								1				1	2
林ペテリウム症	0							1						1
不明	0		4						1		1			6
	2					1								1
計		1	14	0	2	1	6	5	1	1	1	1	2	35

表4 トラフグの診断結果

病名	年齢	月別診断件数												計
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
口白症	0												1	1
ピテリウム病	1		1											1
滑走細菌症	0				1				1					2
	1			1										1
ピバギナ病	0				1	1		1						3
	1			1										1
リン球菌症	1		1							1				1
腸管原虫症	0								2		1			3
	1			3		1								4
トリソミア症	1						1							1
スケッチ症	0												1	1
白点病	0					1	3		2	1				7
	1								1	2				3
林ペテリウム症	0									2				2
	1										1			1
ペテリウム症	0	6		1	1	3	2	1	1	1		2	2	20
	1		2	2	1	1	1	2						8
背鰓スビラン	1			1					1	1				5
不明	0		2	1					1	1				5
	1		1	1	1				1		1			5
計		6	6	11	6	9	6	14	6	2	0	2	3	71

で飼育していた群に白点病が多発した。マハタのウイルス性神経壊死症は水温低下期である11～12月に6件確認された。

感受性ディスク法による各病原菌の薬剤感受性試験の結果を表6に示した。レンサ球菌症原因菌では昨年度と同様にエリスロマイシンに対する感受性の低い株が多かった。

表5 その他の魚種の診断結果

(魚種)	病名	年齢	月別診断件数												計
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
(ススキ)	付ドウイルス病	0												2	2
	列アデノ症	0	1												1
(イサキ)	付ドウイルス病	1	1												1
	不明	0	2	1											3
		1		1		1									2
		2	2												2
(マハタ)	ウイルス性神経壊死症	0							2						2
		1				1			3	1					5
	ペテニア症	0							1						1
		1								1					1
	付ドウイルス病	1									1				1
	不明	0			1										1
(プリヒラ*)	類結節症	0			1										1
	不明	0			1										1
(カンパチ)	不明	0						1							1
(シマアジ)	付ドウイルス病	0							2	1					3
	レンサ球菌症	2				1									1
	ミカゲ病	1								1					1
	付ドウイルス病	0	1												1
	不明	0	2												2
(マアジ)	ビブリオ病	1			1	1									2
	レンサ球菌症	0								1					1
		1				1									1
	ミカゲ病	0								1					1
	アピラジニガ症	0								1					1
	不明	1								1					1
(マサバ)	付ドウイルス病	0				1									1
	レンサ球菌症	0													1
(カサゴ)	不明	0	1												1
(クロアワビ)	筋委縮症	0					1								1
(ニジマス)	付ドウイルス病													1	1
	輸送障害						1								1
(アユ)	環境障害										1	1			2
	計		6	5	2	8	4	4	7	6	4	2	0	0	48

*プリ(雌)とヒラマサ(雄)の交雑魚

表6 各病原菌の薬剤感受性

レンサ球菌症 原因菌

薬剤名	菌株数				計
	-	+	++	+++	
塩酸テトラサイクリン	7	3	3	9	22
フロルフェニコール	0	0	4	8	12
エリスロマイシン	15	2	4	6	27
リンコマイシン	5	1	0	0	6
チアンフェニコール	0	0	7	10	17
アンピシリン	1	8	5	12	26

類結節症・パスツレラ症 原因菌

薬剤名	菌株数				計
	-	+	++	+++	
塩酸テトラサイクリン	5	0	1	16	22
フロルフェニコール	0	0	0	9	9
チアンフェニコール	1	1	4	15	21
アンピシリン	3	5	2	12	22
オキシリン酸	0	0	2	1	3

ビブリオ病 原因菌

薬剤名	菌株数				計
	-	+	++	+++	
塩酸テトラサイクリン	2	0	0	5	7
フロルフェニコール	0	0	0	4	4
チアンフェニコール	2	0	1	4	7
アンピシリン	8	0	0	0	8
ニフルラン酸ナトリウム	1	0	0	3	4
オキシリン酸	2	2	1	0	5

エドワジエラ症 原因菌

薬剤名	菌株数				計
	-	+	++	+++	
塩酸テトラサイクリン	3	1	2	26	32
フロルフェニコール	0	0	1	11	12
チアンフェニコール	1	0	9	20	30
アンピシリン	14	3	7	4	28
ニフルラン酸ナトリウム	0	1	1	0	2
オキシリン酸	0	0	3	2	5